
11月とすべての後で

山本 水城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

11月とすべての後で

【Nコード】

N5282X

【作者名】

山本 水城

【あらすじ】

マサチューセッツ州選出アーレンド・D・ライブハルト上院議員には、悩みがあった。17歳の娘、アンジェリク・マリアが、夜ごとおそろしい苦痛に見舞われることだ。それは、本来ならば、もうとつくに覚醒してもよいはずの能力が、いまだ目覚めていないことから生じているのだ。 シエイブシフター いわゆる変身能力物のパラノーマル・ラブ・ロマンスです。

前夜と回帰

1

痛い

夢の中で叫んだ声なのか、それが目覚めた瞬間だったのか。
窓からは月の光も差さない。

自分が目を開けているのは解る。だって夢がこんなにも暗い訳がないから。

背中が、手足が、身体が、裂けてばらばらになってしまいそうだ。

激痛に身をよじり、シーツをかきむしる。

痛い

痛い

痛い

痛みのあまりに、息も出来ないでいるのか、それとも、叫び声を上げているのか。

もう自分でも解らない。

ずっとずっと向こう、遠くでノックの音がする。
奇妙に不揃いな足音と、スペンサーの呼びかけ

お父様がわたしに手を伸ばす。

大きな掌に抱きとめられる。

微かなシガールの香りのするガウンに顔を埋め、その瞬間だけ、わたしは、ほんのわずかだが安堵する。

もう大丈夫だと、耳元で言うお父様の声が、とても近くて遠い。

その大きな背中に、精一杯腕を伸ばし、懸命にしがみつきながら、わたしは意識を失った。

逡巡と秩序

2

午前6時40分、スペンサーは、いつも通りに主の紅茶の準備を始めた。あるじ

アッサムがメインのモーニング・ブレンド。
濃いめのミルクティーだ。

やがて、マサチューセッツ州選出アーレンド・D・ライプハルト上院議員が、朝食の卓へと現れた。
銀髪がわずかに混じる琥珀色の短めの髪は、きつちりと整えられている

「おはよう、スペンサー」

朝の挨拶は、主人からと言うのが、ここ数十年来のライプハルトの家の習わしとなっていた。

仕え始めた頃は、主人に先に声をかけられることなどあってはならないと恐縮し、使用人としての礼を失してはならぬと意気込んでいたスペンサーではあった。

しかし、主人アーレンド・ライプハルトとの間に、控えめながらも確固たる信頼としきたりを築き上げた今となっては、スペンサーも朝の主人の第一声をゆっくりと待つようになっていた。

「よく眠れたかな？ あれから」

ティーカップに口をつけながら、ライプハルト上院議員は言った。
その灰色がかった緑の瞳は、いつも通り静謐に澄み渡っていた。
だが、スペンサーはその瞳に充血の色があることを見抜いていた。

それはスペンサーだけが気がつくことが出来るほどの、ごく微かのもんではあつたが……。

「十二分に休息させて頂きました、ご主人様」

スペンサーは、『ボストン・グローブ』をライブハルトに手渡す。主人が新聞を広げた隙に、キッチンへと振り返り、卵とトーストの皿を手に取った。

ライブハルトが社説のページを開いたところで、その前に卵とトーストを並べた。

「一度、明け方にアンジェリク様のご様子を覗きましたが、よくお休みのようでした」

スペンサーは、主人のカップを再び紅茶で満たしながら、さりげなく付け足した。

手にした『ボストン・グローブ』テーブルに置くと、ライブハルト上院議員は溜息をついた。

「だが……あれでは、身体が持つまい」

「さようでございましょう……」

スペンサーはグローブ紙を静かに折りたたむと、サイドテーブルにそっと下げた。

ライブハルト上院議員は、皿の卵に銀のナイフを入れた。

スクランブルドエッグを、これほどまでに美しい仕草で食べる紳士を他に知らない。

スペンサーは毎朝の事ながら驚嘆する。

トーストと卵を食べ終え、立ち上がるうとするライプハルトの椅子を引くスペンサーを振り返り、上院議員は言った。

「ベラに連絡しようと思っっている……」

黙して、視線を伏せていたスペンサーが、主に向ってごく軽く頷いた。

「それがよろしいかと存じます……薬の方も、大分少なくなってきましたので」

アーレンド・D・ライブハルトが幼い頃は、数人はいた運転手も、今ではフランツただ一人だけだ。

かつてと比べて、いくら人件費が上がっているからといって、別段、経済的に維持できないというわけではないのだ。

もちろん、アーレンドがマサチューセッツの名門家系らしい、ごくピュリタンのな性質を持ち合わせているということも、その理由ではあったが。

実際、今は運転手は一人いれば十分だったのである。

最愛の妻のエリサも、とうに亡く、前当主とその妻、つまりライブハルト上院議員の両親は10年以上前に、この世を去っていた。

三人の息子達も、いまはそれぞれに家をでた。

いつもどおり、ライブハルト上院議員はフランツがドアを開いた車に乗り込んだ。

主を見送りにでたスペンサーが、自分の乗った車が見えなくなるまで、ポーチに佇んでいるだろう。

いつもどおりのことだった。振り返って確かめるまでもなく、ライプハルトにはそれが解っていた。

走り出して、数分の後、アーレンド・ライプハルトは、もはや身体の一部のように愛用してきたブリーフケースを引き寄せ、電話を取り出した。

「早い時間にすまない、ベラ。今話せるだろうか？ ああ、そうだ、アンジェリクのことだ……」

序幕と変成

3

部屋中に差し込んだ真つ白の光に、横つ面を張り倒されるような衝撃を感じて、アンジェリク・マリア・ライプハルトは目を開いた。

強い光のせいで、すべての物がかすんで見える。

しばらくすると目は慣れてきたが、アンジェリクは起き上がることはおろか、指一本動かすことすら出来ずにいた。

手も足も、頭も重い。

まるで自分の身体じゃないようだった。

夜半に自分を襲った、あの激しい痛み。

でも、このたるさが、痛みのせいじゃないことは、アンジェリクには解っている。

一種の副作用なのだ。これは。

あの痛みを和らげるための鎮痛剤。その薬のせいだった。

起きなくっちゃ。

アンジェリクは、ヘッドボードに腕をかけ、ベッドに吸い込まれそうに重い身体を、やっとの事で引きずり上げた。

……スペンサーに、ベッドまでスूपやミルクを持ってこられたり

する前に。

一度病人扱いされては、当分ベッドから出してもらえなくなるもの。

「アンジェリク様！」

壁や手すりにしっかりと寄り掛かりながら階下に降りてきたアンジェリクを、スペンサーは、すぐに見とがめて駆け寄った。

アンジェリクは、まだ、すぐにその場にくずおれてしまったとしても、まったく不思議じゃない顔色をしていた。

……いくなれば執事のようなもの。

そんな一昔、いや二昔前の言葉でなら、スペンサーの立場を上手く表現出来そうだった。

アンジェリクが物心着いたときには、スペンサーはもうこの家にはい

た。

いや。というか、この家の一部だった。

スペンサーのいないライブハルトの家など、アンジェリクには想像出来なかった。

「……お父様は、もうお出かけ？」

「はい、いつもどおりで」

支えるようにしてアンジェリクをソファに座らせて、スペンサー静かに答えた。

「ごめんなさいね……スペンサー。昨晚は」

スペンサーはアンジェリクと視線の高さを合わせるように無言でソ

ファアの脇に膝をついた。

「お加減はいかがですか？ なにか飲むものをお持ちしましょう」
陽差しを受けてきらめくアンジェリクの金の髪の輝きに、一瞬目を細め、スペンサーは立ち上がった。

「スペンサー、午後から少し出かけるわ」

フレッシュジュースのグラスを半分ほどあけたところでアンジェリクがこう言うと、スペンサーは思わずとがめるように、片眉を引き上げた。

「心配しないで、もうなんともないもの。それに、短いアンサンブル曲を幾つか合わせるだけですむのよ」

アンジェリクのいいわけめいた言葉の終わりまで聞かぬうちに、スペンサーは言った。

「サフォーク監獄の慰問にいらっしやる件ですね。アンジェリク様？ それは、言うなればボランティアの活動ではないですか。差しですがましいようですが、今回はお取りやめに……」

「だめ、そんな訳にはいかないわ」
アンジェリクが不服げに、コーラルピンクのくちびるを歪めてみせる。

たいていの男は一分としないうちに、このくちびるにキスしたくてたまらなくなり、首筋がピリピリとしてくるに違いなかった。

「だって、すごく小さなアンサンブルでバイオリンはわたし一人なのよ。それに、前もって申請した人と違う人がいきなり訪問するわけにはいかないような場所よ？　ね、わかるでしょう、スペンサー」

アンジェリクのエメラルド色の大きな瞳で、両の目を見据えられ、大まじめにこう言われては、スペンサーもそれ以上の言葉は継げなかつた。

小さく溜息をつき、スペンサーは微笑んだ。

「決してご無理をなさってはいけませんよ。お父様に心配をかけたくはないでしょう、アンジェリク様。今日は私がお送りします」

……でも、と言いかけたアンジェリクを遮って、スペンサーは続けた。

「そして終わったら、お電話を。お迎えに上がりますから、いいですわね？」

転送と邂逅

4

「聞いたぜ？ D D、何をやらかしたんだ？ いや、それとも、
ディー・ディー
種の大出世かよ」

一体、もう何回目だ？ 知り合いに会う度この話だ。

まあ、それも仕方ないのかも知れない。

州警察のSTOPチーム いわゆるマサチューセッツ州のSWA
Tだが から、いきなりの捜査局への異動の命令が下ったとき、
誰よりも自分が一番面食らったくらいだ。

そんなルートの異動話なんて、これまで聞いたこともない。

ついこの間、27歳になったばかり。

まだまだ、特殊部隊の仕事に支障のあるような年齢でもない。

もちろん、特に希望を出していた訳でもなかった。

まさに青天の霹靂とはこのことだ。

「ドナーテイ 巡査長、こっちだ」

前を歩いていた巡査部長が、ドージェを促す。

巡査部長がドアをあけ、さっさと中に入っていく。

しまりかけるドアを慌てて押さえながら、ドージェも後に続いた。

増え続けるIT機器に対応するため、最近、どうやら大幅に内装を
改めたらしい。

ガラスが多用された、モダンなミニマムインテリアのオフィスだった。

古くさいスチールデスクとブラインド、木のスツールといったオールドスタイルの警察事務所など、もはやアンティークなみの貴重さかも知れない。

そこに並んでいるメンツも、ドージエに言わせれば、インテリアと同様「スカしてて、薄っぺらい」連中だらけのようだった。

「ドージエ・ドナーティー 巡査長だ。本日付で、特殊部隊から、捜査局のうちの班に配属になる」

巡査部長は、ドージエを指し示すように軽く手を掲げた。

巡査部長の言葉に、班員たちのほとんどはデスクに座ったまま、ごく面倒そうに顔を上げてみせただけだった。

形だけでも歓迎の表情をして見せるなんて、まるで膨大な時間のムダだとも言わんばかりに。

露骨な反感を示されるわけではないが、ここまでこれみよがしの「無関心」を装われては、ドージエは、すぐにでもSTOPにとつて返し、サブマシンガンを持ってきてぶっばなしてやりたい気分になった。

灰色といおうか……どちらかといえば黄緑に近いドージエの瞳は、たてがみのように輝く赤銅色の髪とあいまって、彼に独特のオーラのようなものを纏わせている。

ドージエに、どことっておかしなところがあるわけでない。

顔立ちはくっきりと濃い、端正に整っているし、特殊部隊の訓練

で鍛えられた肉体は素晴らしいものだった。

端的に言って、彼は美男子だ。

だが、ドージエのたたずまいには、なにかしら、周囲の者を落ち着かない気持ちにさせるところがあった。

……どいつもこいつも。

鼻白む思いで、ドージエは周囲の連中を見まわす。

全員が全員、襟にアイロンのかかったシャツを着て、櫛のあたった髪型だ。

レザージャケットにラバーソールのブーツといった出で立ちのドージエは、この場では完全に浮いていた。

「レイナー。ドナーティにレクチャーを頼む」

巡査部長はメタルフレームのメガネの男に声をかけた。

メタルフレームの男、レイナーはドージエに近づいて、右手を差し出した。

「よろしく、ドナーティ。ああ、『DD』と呼んでいいのかな？」

レイナーはこう言って口の端を歪めた。愛想笑いというより、皮肉にしかみえない表情だった。

ドージエは相手の倍以上の握力で、手を握り返してやる。

「STOPでの君の『伝説』レジェンドは、ここみんなが耳にしているぞ、

『超人DD』。一体、なんと表彰されたっけね？ 君は」

握手を終えてしびれた右手を振りながら、レイナーは「つまらない事だが」と前置きをして話を続けた。

「捜査局のこの班は、重罪、なかでも強行犯を扱ってる。殺人やそ

れに準ずるようなね。マサチューセッツの殺人捜査がどんなものか、まあ、君も知ってるだろうけど、DD?」

いちいち厭味なヤツだ。

ドージェはレイナーの問いかけは完全に無視した。

「もちろん州警察のボストンでの管轄は、基本的に州の不動産における犯罪になるが。殺人に関する捜査権限は、実質上地区検事のものだ、つまり……ここではジェシカ・ローウエル検事が、捜査のすべてを決定できるってわけだ、捜査につくスタッフひとりひとりで口を出せる。州警察官でも市警でも選り取り見取りってわけだ」なるほど。

だから、ここの長たる、あの巡査部長の影が、あんなにも薄いわけだ……?

ドージェは軽く鼻で笑う。

「スタッフを紹介しようか?」

レイナーの口調はいちおう試してみた、というような感じだった。

「では、願います」

この部屋に入って、ドージェは初めて口を開いた。

それまで無関心を装っていた連中が、ドージェの声に思わず反応して、一斉に顔を上げる。

ドージェの声にも、何故だかわからないが、いつも人の注目を集めてしまう類の何かがあった。

やれやれ、先が思いやられる……。

ドージェはため息を漏らした。

変成と安穩

5

窓を開けていたから暖房はいらない、とだけ言うと、アンジェリクはシートに寄り掛かり、目を伏せた。

まだ、本調子ではないのだろう……。

ルームミラーでアンジュの様子を窺いながら、スペンサーはイグニッションキーを回した。

ボランティアのための練習になど、今、無理をして行かなくてもよかるうに。

なるべくならば、お部屋でゆっくりして頂きたいのだが。こう思いながら心の中で溜息をついたが、そのような感情を表に出すことなど、スペンサーには決してなかった。

スペンサーはふたたび、ミラー越しにアンジュに目をやる。瞼を閉じ、じつとシートにもたれているようだった。

もし、観賞用に完璧な少女の人形を作るとするならば、おそらくこんな風になることだろう……。

スペンサーはアンジュを見ると、しばしばそんなことを思った。

金の髪は生まれつきの見事な巻き毛。

長いその髪は、束ねられたり編みこまれたりすることもあるが、大抵はただ自然におろされ、風に揺れてきらめく。

髪と同じ色の長い睫毛。

閉じられた瞼の奥には、深いエメラルドグリーンの大きな瞳が隠さ

れている。

服装は華美ではないが、ライプハルトの者らしく上質のシンプルなもののしか身につけない。

ライプハルト上院議員の、旦那様のひいきの店で仕立てさせる美しいシルエットのシャツ。

さりげなく使われるレースがヨーロッパのアンティークであるところだが、控えめながらも贅沢な作りだ。

ボトムスは、あせたブルーのジーンズで、これは以前、ヘンリー様が、旦那様の二番目のご子息だが、着ていらしたのを譲り受けてからずっとアンジユ様のお気に入りだ。

外出によく履かれるのは、山羊革のショートブーツ。

美しい焦げ茶色で、これも以前、旦那様が仕立てさせたものだった。

そして、そのアンジユ様の傍らには、いつも、飴色のすばらしい革を張ったバイオリンケースがある。

なかに入っている楽器は、さらにすばらしい琥珀色だ。

先々代のライプハルトの当主、つまり旦那様の祖父に当たられる方が、トリノに注文して作らせたファニヨラのプレッセンダ・モデルだった。

先々代のバイオリンはどうやら道楽にすぎず、折角の名器も彼の演奏では、奥方達の御不興を買うことしかなかった、と伝え聞いている。

だが、アンジユは違った。

その才能がずば抜けていることは、素人のスペンサーがみたところでも明らかだった。

現当主のライプハルト上院議員も、時折、スペンサーにだけはこうもらしていた。

「……このファニヨラは、アンジュのために作られていたとおもわないか？ スペンサー、うちの『じいさま』は、ずいぶんと用意がよかったことだ」と。

アンジュは幼い頃から、おとなしく、口数の多い少女ではなかった……。
とはいえ、その緑色の瞳は、時に言葉より饒舌に光の色を変えた。そして、もの言いたげなその瞳には、彼女が口を開くのを、思わず聞き手がじつと待ち望んでしまうような魅力があった。
淡いコーラルピンクのくちびるから、ゆっくりとあふれ出すひとことひとことに、耳を傾けたくなる。

旦那様をはじめ、アンジュ様のお兄様方も、皆それぞれにこんな風に、どこか人を惹きつけて離さないような魅力を備えているのは、やはりライブハルトの血筋だからなのだろう……。スペンサーは、そんなことに思いを巡らせる。

アンジェリクは、まだ瞼を閉じたままだった。

このところ、薬を使う頻度が増えていた。

……お体に、かなり負担になっているはず。

スペンサーの心に、また重いものが沈んでいった。

どうしてなのか？

……長子のアレックス様もヘンリー様も三番目のジヨナサン様も、みんな覚醒はスムーズだった。

普通ならば思春期の頃に、目覚めるものなのだ。

アンジュ様の目覚めは、なぜこんなに手間取るのか。

もうすぐ18歳におなりになるというのに……。

夜ごとの、あのひどい苦しまれようは、見ている方が辛い。

スペンサーは、またルームミラーに視線を向ける。

どうかすると、まだローティーンにも見えるような華奢な身体だ。だが、覚醒できないのは「成熟していないからだ」などということ
は、決してないはずだった。

少なくともスペンサーは、そう確信していた。

甘やかな香りが、車内に広がっている……。

車の窓が開けられ、微風が通り抜けているというのに、スペンサーにはその香りがはつきりと判った。

たまらなく甘い香りだった。甘い花のような。

ライブハルトの一族を知り尽くしているスペンサーには、この香りが何であるのか、間違えようもなかった。

これは、まるで生きた人形のような、あの少女から立ち上るっているのだ。

……そして、この甘やかな芳香は成熟した女性が放つもの。どんな異性の理性の掛けがねをも、すべてはずしてしまつ。あらがえない誘惑の甘い香りだった。

目覚めは、もうすぐのはずなのだ。

なのに覚醒前に特有な、あの苦痛だけがいつまでも長引くというの

は、一体どうしたことなのか……。

アンジェリクが、ふと瞼を開いた。エメラルド色の瞳が微かに揺らめく。

「スペンサー？」

スペンサーは静かに答えた。

「もうすぐ着きます、アンジュ様。そういえば、今朝、旦那様が」

「お父様が？ なあに」

アンジェリクが、ゆっくりと身体を起こす。

「誕生日には何が欲しいか？」と

「……え？」

「11月はお誕生日月ではないですか？ アンジュ様」

スペンサーの言葉に、アンジェリクは微笑んだ。

使い古されたメタファーだが、まるで花蕾がこぼれ咲く様子、とスペンサーは思った。

「欲しいもの……」

アンジェリクは数回瞬きをした。

スペンサーも、口元にわずかに笑みをたたえた。

「いましばらく考えるお時間はありますよ。アンジュ様、お話の続きは、旦那様がDCからお戻りになってからになりますよ。うから」

「やあ！ お姫様、きょうは運転手付きでおでまし？」

アンジェリクが振り返ると、ヴィオリストのテオジーンが立っていた。

コーンローに編んだ暗褐色の髪につけた飾りをきらきらとさせて、いつもどおりコーヒーチェーンのロゴの付いた大きなタンブラーを片手にしている。

テオジーンの軽口になんの悪気もないことは、アンジェリクにもよく分かっていた。

ライブハルトはボストンの名家だ。

メイフラワー号云々というくらいまでの古い家柄で、代々連邦の上院議員を歴任している。

アンジェリク・マリア・ライブハルトという名前を聞いて、「あの」ライブハルト家のことを思い起こさないボストン市民はいない。

だからこそ、あえてアンジュをお嬢様扱いしたり、父であるA・D・ライブハルト上院議員や兄のA・ライブハルト下院議員の名前を出したりするようなことを、アンジェリクの周囲の人々は、決してしない。

テオジーンがこんな言い方をするのは、彼の冗談好きで陽気な人柄のせいだ。

それに、彼がマルセイユ出身で、パリの国立高等音楽院とジュリアードを渡り歩いたのち、今はバークリーに通っているという変わり種であるせいでもあるかもしれない。

アンジェリクは、テオジーンの言葉に何と応えたものかと思い、彼のチョコレートのような黒目がちな瞳を見つめた。

普通の女の子がそうであるようには、アンジュは喋るのが得意ではなかった。

色々な事を、自分の感情を。

言葉で表現するには、自分の中にいくつもの見えないハードルのようなものがある。

それは、歳の離れた三人の兄に過保護に守られてきたからなのかもしれないし、幼い頃に、なぜか寝込むことが多かったからかもしれない。

でも、喋ることが嫌いなわけではなかった。

アンジュが、自分の心の中にわき起こる様々な感情を表わす方法。それは、バイオリンを弾くことだった。ごく小さい頃から、気がつくとそうだった。

……わたしの演奏はほんとうにお喋り。

アンジェリクは自分でもそう思っている。

父もアンジュに向って、お前はバイオリンではずいぶんと饒舌なのに……としばしば口にするほどだ。

テオジーンはといえば、タンブラーを持った方の腕で、アンジェリクの肩をハグし、まっ白な歯を見せて屈託なく笑っている。

……テオジーンは笑うとミシェル・バスキアに似てるわ、とアンジュはいつも思う。

「アンジュ？ 顔色が悪いみたいだ。ははあ。それで『執事』が心配して送ってきたんだな」

テオジーンの言うとおり、スペンサーの手前、元気に振舞ってはみせたものの、アンジェリクはまだ身体がひどくだるかった。

テオが開けてくれたドアを通って、アンジュはスタジオの中に入っていく。

近所にはポストン音楽院やバークリーがあるから、この辺りには、こんなようなスタジオがごろごろしている。

「あれから、fbにメッセージが来てさ。ジョージのヤツ、まだ、デイヴェルティメントを演目に入れるの、諦めてないんだぜ？」
テオジーンがタンブラーに口をつけながら言った。

おそらく、中身はいつものソイミルクのカフェモカだ。

「……Eフラットの弦楽三重奏は、わたしも好きよ、テオ」
濃紺のコートを脱ぎながら、アンジェリクは言った。

いつものトレンチを着ようとしたところ、スペンサーに厚手のメルトンに着替えさせられたのだ。

「でも、長すぎて今回には不向きだっていうあなたの意見には賛成なの」

……三重奏のデイヴェルティメントは慰問の演目としては、プライオリティが低いのではないかな？

お父様もおととい、わたしの考えに賛同の意を表明してくれたっけ。

「そりゃ、僕だって『刑務所の慰問なんだから、パツヘルベルでもやっとけば?』なんていうのはナンセンスだと思っただけだね」

……そもそも、三人でやるカノンって、ちょっと気が抜けてる音だものね。

そんなことを考えながらアンジェリクは、ケースからバイオリンを取り出し鎖骨のくぼみに置いたが、口には出さなかった。

そして、袖をたくし上げようとして、ふと手を止めた。

注射の跡が、まだ腕にいくつも赤く残っている。

目にした人は、きつとぎよっとするに違いない。

それどころか、ドラックにでも手を出したのかとでも、思われかねないもの。

「で? 君はベーターベンがいつて言うんだよね? アンジユ、

やっぱりエスタブリッシュメントだよ、君って」

テオジーンは明るい笑い声をたてた。

「……ありきたりだっけいいいたいのね? テオ」

アンジユは口ごもって、テオの目を見つめた。

テオは笑い止めて、黙った。

アンジユの次の言葉を待つかのように。

「……あのね。今回は無理なのはわかってる、でも本当はシトコヴエツキーのゴールドベルクができればよかったと思ってるの……」

テオジーンは、アンジェリクをなだめるように、また続けた。

「僕もゴールドベルグは、じっくり時間を演奏したいね。暖かくな

「だったら、外でちょっとしたイベントをやったっていいじゃないか？
いずれさ」

「……暖かくなったら。」

アンジェリクは心の中で溜息をついた。

来年の六月には、ハイスクールを卒業する。

わたしは、来年の夏には、一体どうしてるのだろう……。

誕生日に欲しいもの。

ふと、スペンサーの言葉を思い出した。

……「もの」じゃないけど、お父様をお願いしたいことはある。
でも、それは許してはもらえないかもしれない……。

このところのわたしは、自分でもどうしたのかと思うほど変だ。

毎晩のように苦しめられる、あの痛み。

本当に、身体がばらばらになってしまいそうなの。

昔からの知り合いのドクター・モーリス、アナベラは、心配いらな
いと言っただけだ。

この頃はスペンサーやお父様も、本当はなにか不安に思っているの
がわかる。

「それにしてもジョージ、遅いな。まあ、いつものことだけど」

テオの声で、アンジュは自分のチューニングの手がすっかり止まっ
てしまっていたことに気がついた。

テオと視線が合ったアンジュは、黙って彼にほほえんでみせた。

同盟と推論

7

「お忙しいところわざわざ、ようこそ。セネター^{上院議員}」

ドクター・アナベラ・モーリスは、自分のオフィスに入ってきたア
ーレンド・D・ライプハルトを事務的な口調で迎えた。

アナベラは、州警察の科学捜査班にオフィスを持っている上席研究
員だ。

かつては、臨床医をしていたこともあったが、ここ十年以上、州警
察で働いている。

きっかけは、ライプハルトの口利きだった。

というよりは、ライプハルトが強くそれを望んで、実現させた。

彼はアナベラに、この地位にいてもらわなければならなかった。

「ベラ、君が『直接話を聞かない限り、もう薬は出さない』という
のだから、仕方がない」

アーレンド・ライプハルトは、アナベラが席を勧めるまで腰掛けよ
うとはしなかった。

「当然よ、あんな薬。際限もなくどんどん出せない。で？ アンジ
ユはどうなんです？」

きびきびとしたアナベラの問いに、ライプハルトはしばし黙り込ん
だ。

上院でも有数の有力政治家であるライプハルトがいかなることであ

れ、こんな風に返答に窮するさまなど、他の誰も見たことがないはずだ。

「アーレンド？」

アナベラはやや声を和らげた。

彼女がライブハルトのファーストネームを呼ぶことは、たとえふたりきりだったとしても、ほとんどないことだった。

友人として、相談にのりたいのだ。

アナベラは、自分の気持ちをこのような形で表現した。

ライブハルトはすぐに、いつもの誇り高さと力強さを取り戻した。

穏やかで、しかも威厳に満ちた声で、アナベラに答える。

座を、聴衆を一瞬にして魅了する声だ。

「アンジュは良くない。ほぼ連日、夜中に決まって苦しがる。薬を使わないと落ち着かせることが出来ない」

「では、まだなのね……？ シェイプシフト 変身は」

「まだまだ」

アナベラはひといき溜息をはき出して、デスクチェアに背中をもたれさせた。

「遅すぎるわね……痛み自体は、シェイプシフトに伴うものに間違いないと思うけど。普通なら、ひどい痛みはせいぜい数回あるだけで変体は完了する」

「理由があるとすれば、何が考えられるのだ？ ベラ」

ライブハルトの問いを受けて、アナベラは改めてデスクの上のカル

テを手に取る。

「……この間も話したとおり、原因は不明よ。特段に問題は見当たらないの。ホルモンバランスも通常、血液も、内臓機能も」

ライブハルトは無言だった。

だが、その鋭い視線は、彼がアナベラの答えに満足していないことを物語っていた。

アナベラは、また溜息をつくと続けた。

「そもそもシエイプシフターの、特に女性の生理データは、確実な推論を導き出せるほどに揃ってるわけじゃないのよ、わたしの言ってること、わかるでしょう？ アーレンド」

「さもありなんだ。歴史的にも医師の資格を持つシフターというものが。多くはなかった」

「……そうね、それに、たいていの場合にはシフターに医者は無駄なもの」

アナベラは苦笑した。

……だって、寿命が尽きてしまうまでは、彼らはは、ほとんどの身体シフターの損傷を自分で修復できるだけの力があるのだから。

「シフターが信頼できる人間ヒューマンの医師も、ほとんど存在しない。君は非常に希有な存在だよ、ベラ」

アーレンド・ライブハルトは、わずかに微笑んだ。

ライブハルトの微笑は、昔から一種の武器と違ってよかった。五十代も半ばを過ぎた男のその微笑には、年相応の渋みの中に、若い頃のままのチャーミングさも垣間見える。

その微笑みを見せつけられると……。

いつものことではあったが、やはりアナベラは下腹部に熱い痺れを感じずにはいられなかった。

「……お褒めにあずかり光荣だわ。セネター」
皮肉半分にアナベラは答えた。

「ともかくシフターの女性に関しては、何らかの根拠とできるようなデータは整ってないの。だって、ただでさえ少ないシフターの内、女性はほんの2割しかいないんだから……」

ライプハルトの口元から、微笑みが消えた。

「……申し訳ないけど、これがわたしの限界」
アナベラはふたたび淡々とした口調に戻る。

「ともかく、薬はもう出せない。様子を見ないことには。どうしてアンジユを、彼女を連れてこないの」

「それは難しい、あれも、このところは不安になってきているようだ。来たがるまい」

ライプハルトは苦笑まじりに言った。

「そうことを言っている場合じゃないでしょう?! これだからシフターは……」

アナベラはここで、ひと息おいて、気分を落ち着けようとした。

「彼女には、アンジユにはまだなにも話していないのね、覚醒のこと、シェイプシフトのこと」

重苦しい沈黙が流れる。

「どうして？ 覚醒してから話すよりは、先の方がいいにきまつてる、本人のためにも。だいたい、アレックスの時はどうだったの？
アーレンド」

「アレックスはライブハルトの次期当主だ、幼い頃から言い聞かせてあった……それに、ヘンリーとジョナサンは、それぞれ兄の目覚めを見ている」

アーレンド・ライブハルトの答えに、アナベラは軽く頷いた。

「確かに、アンジュは上の三人とは歳が離れすぎているわね……彼らはとつくに家を出ているし。それでも、幼い頃に彼らのシェイプシフトを見せておけなかったの？」

ライブハルトは静かに語り始めた。

いつもの、支持者を魅了するスピーチの時のような落ち着いた声で。

「われわれは覚醒の件については、細心の注意を払って子供達を教育するのだよ、ベラ。幼い頃ころから順々に聞かせておくものだ。物心つくかつかないかの時に、しっかりとシフトを見せておく。とはいえ、周囲に何でも話したがるような分別のないときに、細かいことまで話すのは危険すぎる……ただ、覚醒直前の不安定な年頃にいきなりすべてを教えるのは、それも彼らには過酷すぎる経験になってしまうから、なるべく避けねばならない」

「……アンジュには、そんな風に教育できなかつた？」
アナベラが問いかける。

「あの事件で……あの子の記憶から3歳より前のことは、すべて消

えてしまっている。それにその後は……アンジュは本当にひどいありさまだった。フラッシュバックを起こして倒れなつたのは、ほんの最近のことなのだ。ベラ」

あの事件……。

このことを思い出すときのアーレンドの灰緑の目には、何ともいえない悲しみの色が浮かぶ。

話を「そこ」に及ばせてしまった、自分の方を責めなくなるほどに見ているアナベラの方が、いつも切なくていたたまれなくなる。

アナベラも、実際のところ、その『事件』がどんなものなのかは、よくは知らない。

だが、まるで自分を守るためであるかのように、そのことを忘れさってしまっているアンジュのためにも。

そして、娘をなんとしても守りたいというアーレンドの気持ちをおしはかると……。

アナベラは、そのことを掘り返すようにしてライブハルトに尋ねる気にはとてもなれないでいたのだった。

「ともかく……」

アナベラはふたたび口を開いた。

「薬はもうそんなに簡単にだせない。それにあれは危険すぎるの、もし普通のヒューマンにでも使われたら……」

「ベラ、それについては心配ない。スペンサーが管理している」
ライブハルトは即座に言い返した。

……シフターの自己修復力。

それが、やっかい問題となることもある。

薬というのは、結局のところ身体にとっては異物だ。

体内に入れば、人間でもシフターでも最終的にはそれを分解して無害化する働きを持っている。

ただ、シフターのそれは、あまりにも早いので、普通の人間が使うような薬は彼らにとって、ほとんど効果がないのだ。

鎮痛薬、睡眠薬、麻酔薬。まるで効かない。

……だから、シフターが医者にいきたがらないってわけなのだけど。ひどい怪我で、治療時に痛みを抑える必要があったところで、まるで薬が効かないのだから。がまんして自分で治した方がまっしてことだ。

とはいえ、やはりシフターにも麻酔が必要なことがある。

ベラは各種の薬品の配合を研究して、シフターに使える鎮痛剤を独自に調合していた。

しかし、それは普通の人間にとっては劇薬以外の何ものでもない……。

不用意に誰かの手に渡っては、大変な事だった。

一般になじみのない薬品でもあり、ふつうの医者が治療に手間取って大事に至りかねない。

それに、量によっては即死だ。

「……あれはアンジュの身体自体にも、良くないものなのよ。アーレンド」

アナベラは辛抱強く言い聞かせる。

……そんなことは判っている！

ライブハルトは心の中で叫んだ。

だが、あのまま苦しませるわけにはいかない。

どうすることもできないのだ。覚醒が始まるまでは。

アンジユが覚醒できない理由……。

ベラには言えないが、ライブハルトは内心、ずっと考え続けていることがあった。

それは、彼のおぞましい過去のあやまちのせいではないのかと。

それが理由だという根拠など、何もなかった。

これは、単にアーレンドの罪悪感の表れに過ぎないのかもしれないのだ。

沈み込んでしまったライブハルトの前に、とうとうアナベラの方がおれた。

「……わかったわ。少しだけよ。でも、今回出した薬がなくなったら、次はダメ。彼女を連れてきて、いいですね、セネター？」

「本当に助かる、ベラ」

アナベラがバッグから鍵を取り出し、ロッカーを開ける。

そして、その中に設置されているキャビネットの生体認証ロックを外した。

「……君が我々のような異形の化物に、理解を示してくれることに感謝する」

ライプハルトのつぶやきに、アナベラは血相を変えて振り返った。

「アーレンド！ シフターも人間よ、^{ヒューマン}以前にも言ったけど、シフターの性質の発現は、おそらく遺伝子の問題なの」

アナベラの言葉に、ライプハルトは口元を歪めた。

気高い彼らしからぬ、苦々しい皮肉混じりの微笑だった。

「……猿と人間も、たかだかDNA1%ほどの違いだそうじゃないか、ベラ」

アナベラはアーレンドを無言で見据えながら、ゆっくりと例の薬を手渡した。

見開いた枯草色のアナベラの瞳には、悲しみとわずかの怒りが揺らめいていた。

ライプハルトはそれを受け取ると、立ち上がり、ドアへと歩き出した。

ドアを開ける前に、ゆっくりとアナベラを振り返った。

アナベラはまだ、ライプハルトを見据えていた。

「今のことは忘れてくれ、ベラ。わたしは少し疲れているようだ」

そして、アナベラの返事を待たずに、アーレンド・D・ライプハルトは、部屋を出て行った。

慣例と欲望（前書き）

この回はいわゆるところの、かなり「ホット」な描写があります。あしからず、ご了承くださいませ。

部屋のドアを閉めると同時に、ドージェはその女の身体を壁に押しつけた。

ミニのワンピースの裾をまくり上げ、ヒップの方からショーツの中に手を入れる。

すでに女の身体は欲望に濡れていた。

ドージェは、なんの前戯もなしに、そのまま後ろから女の中に入った。

立ったまま、激しく犯し続ける。

新しい部署は、退屈でたまらなかった。

……尻に根が生えそうだ。

ドージェ・ドナーティは、捜査局の文書作成マニュアルをデスクの上に放り投げて、オフィスを後にしたのだった。

まったくもって、「帰宅時に、ドージェ・ドナーティ巡査長は机の上にマニュアルを放り出した」ということまで、いちいち文書にして報告しなければならぬのか？　と思うほどの細かさが要求された。

警察の仕事というものは、そもそも書類作成が多い物だ。

それは、ドージェも知っている。

それにしても、捜査の連中ときたら。

他に、そんなにやることがないのか？

特殊部隊
STOPは、突発事態に備える出勤待機の時間もあるが、訓練も多かった。

武器の管理や、突入の経過報告は内勤者がかなり手がけてくれたから、ドージェは、これまで、こんなに書類仕事に忙殺されたことはなかった。

STOPの任務は自分に向いている。

ドージェはそう思っていたし、事実、STOPでは自分の『能力』を、多少なりとも何かのために活かすことができていたはずだ。

別に、『超人DDD』などという、やっかみ半分につけられた二つ名に、自尊心をくすぐられていたというわけではない。

ヒーロー面して、表彰の回数を得意に思っているわけでもなかった。

業績があるなんて、そんなことは当然のことなのだ。

自分は他の隊員より、生まれもつての『能力』が優れているのだから……。

撃たれることは怖くなかった。

何丁ものマシンガンで蜂の巣にでもされない限り、自分が死なないということは判っている。

たとえシェイプシフトしていなくても、身体能力は人間ヒューマンとは比べものにならない。

シフトした時のさらなる強靱さを任務中に示すことなど、もちろん当然できることではなかったけれども……。

ドージェは繋がったまま、女を片手で持ち上げ、ベッドへと押し倒

した。
女の首筋に立てた歯が、鋭くとがり始めている。
快感が高まって、知らず身体の一部がシフトを始めていた。
女は行為に夢中で、まるでそれには気がついていない。

ドージエは、鋭い爪で女を傷つけないように、手の位置を動かす。
ほどなく女は絶頂に達したが、ドージエはさらに激しく女を突き上げる。

「死ぬような目にあわせて、とか言ったな？ ベイビー、まだまだだろう？」

たとえ恋愛関係になっただとしても、シフターの男はヒューマンの女とはそう長く関係をもてない。
シフターの強さに消耗して付き合えなくなってしまっただった。
どんな貪欲な女でも、いずれはシフターの男には降参してしまう。

ドージエは男盛りだった。欲望は尽きない。
このところの仕事の退屈さも、それに拍車をかける。
寝る女に不自由したことはなかった。
男達の社会のなかでは、ドージエの異質なムードは周囲の警戒をおおるが、女にとっては、それは甘美で危険な魅力だった。
野性的で激しい……。

だが、ヒューマンの女を心から愛したことなど、ドージエには一度もなかった。

ドナーティの家は比較的新しい移民だったが、アメリカに来る前から続くシフターの家系だった。

ドージエの頭には、昔からのシフターの掟が刻み込まれている。

つがう相手はシフターだけ。

初めて自分に抱かれる雌のシフターと「絆を結ぶ」のだ。

そして、子を生ませる。

死ぬまで、つがいの雌は自分だけのものとなる。他のシフターには触れさせない。

だが、それは困難なことでもあった。

なぜだか判らないが、雌のシフターはほとんど生まれえないのだ。だから、一生つがいをもてない雄のシフターなど、ざらにいる。

それに加えて、雌のシフターは短命だった。大抵は、40歳をこえて生きることはない。

ドージェの母親も30半ばで寿命が尽きた。

シフターの雌は、常に奪い合いなのだ。

だからこそ、つがいを裏切ることには許されなかった。他の雄に身体を許すことを認めれば、それはひどいカオスになりかねない。

ドージェもまだ、つがいとなるべきシフターに出会えずにいた。

逢えばわかるのだ……。同族は。

シフターの雄共には時折、街や、場合によっては突入現場で出会うことがあった。

独特のオーラ。

そして、雄の匂いがして、すぐにそれと知れた。

自分が本当に愛せるのは、シフターの雌だけだ……。

もちろん、ドージェだって、ベッドを共にするヒューマンの女達に

なんの好意も抱いていないというわけではなかった。けっして、誰でもいいというわけではない。

心が動く相手ではないと、こんな風に欲望をぶつけることなどできようもない。

しかし、彼女たちと一生を共にするなどということは、一度たりとも考えもしなかった。

それに、安定した長い付き合いを続けること自体が、そもそも無理なのだ。

女というものは、勘が鋭い。

いずれは、ドージェが「普通」ではないことに気がつく。

その時、二人の関係を、一体どうすればいいというのだ？

ドージェの下の女は、もう何度目かのオーガズムに達して虚脱状態になっていた。

そろそろ、別の女を捜す潮時かも知れない。

情が移りすぎて、別れにくくなる前に。

女が消耗しきってしまう前に……。

ドージェがそんなことを考えていた瞬間、ベッドの下で携帯電話が鳴った。

脱ぎ捨てたジーンズのポケットに入れっぱなしにしておいたのだ。

何度か留守電に切り替わっているというのに、繰り返しかかってくる。

女から身体を離し、ドージェは仕方なく電話を拾い上げた。

「ドナーティだ」

低く応じると、スピーカーの向こうから、ひどく焦った声が返ってきた。

巡査部長のポッターだった。

「DD、すぐにオフィスに戻ってくれ……重要な用件だ」

捜査局に異動してからは珍しいことだった。

STOPにいた頃なら良くあったことだが、夜にいきなり呼び出しとは？

……何があつたのか？ などと訊いたところで無意味だ。ドージエはそう思った。

呼び出しの理由が、たとえどんなことであれ、オフィスに出向かないという選択肢など、最初から自分には与えられていないのだから。

丁度いいだろう。

どうせ退屈しきっていたところだ……。

ドージエは、脱ぎ捨ててあった服を手早く身につけると、ベッドに女を残したまま、ホテルの部屋を出て行った。

光臨と帰還

9

「市警が逮捕した殺人犯が逃亡した」

ポッター巡査部長はドージェがオフィスに戻るなり、説明を始めた。

まだ、幾人かの捜査官たちがオフィスに残っている。

彼らは完璧に無関心を装いながらも、ドージェの呼び出された理由を聞き逃すまいと、全身を耳にしていた。

「逮捕は、現行犯だったらしいが……検察に引き渡す時に隙を突かれたらしい」

馬鹿が……。

逃げてどうなるって言うんだ？

ドージェは心の中で毒づいた。

一度、逮捕されているならば、最後まで逃げおおせるのは至難の業だ。

すでに、さまざまな情報が警察に蓄積されている。

ほんのわずかの油断が命取りだ。

顔写真、指紋、DNA、どこからでも足がつく。

それともそうまでして逃げなくてはならないほど、何人も殺っちまったとでもいうんだらうか。

ポッターは、ドージェの疑問を察したかのように言葉を継いだ。

「殺したのは一人だ、実の息子を殺っている……犯人はヤク中でな、錯乱もある」

「誰にかみつくかもしれないそんな狂犬を、うっかり逃すなどと……」
ドージェは思わず口にした。

周囲の捜査官たちから、苦々しい笑い声がもれた。

それは、被疑者を逃した市警の失態に対してというよりは、不用意な失言をしたドージェに対してだった。

事情によってはこちらも同じように責められる立場となる可能性は、いついかなる時にも考えられるのだから。

「いま市警が体制を組んで、ヤツの立ち回りそうな先を探している……。検事が……」
ポッター巡査部長が一息ついて、口ごもった。

「……ローウェル地区検事も、今回の件を非常に重く見ている。市警の捜査とは別に、独自の捜査チームを立ち上げると連絡があった」
事務室の空気が、一瞬にして変わった。

「うちからはDD、お前が参加することになった……これは、ローウェル検事直々の指名だ。言うまでもないことだが、断れないからな」

捜査官たちは無関心の仮面を脱ぎ棄て、驚きと嫉妬と、半ば嘲笑の入り混じったようなうすら笑いを浮かべ、ドージェを見ていた。

「本部はここに置かれる。ローウェル検事はあと十分で到着するぞうだ。チームには市警の刑事も出入りすることになるから」
ポッターはここまで言い終えると、話をそれで切り上げた。

質問はなし、といった感じだった。

「で、俺が行くことになったわけですね？」

リュウ・リストパト刑事は、携帯の通話をスピーカに切り替えて、手をハンドルに戻した。

パラついていた小雨が、本降りに変わる。

フロントガラスにぶつかる雨音が大きくなった。

リュウは左手でワイパーのボタンを押した。

帰宅途中の車の中だった。めずらしく早めに帰れるところで、一杯飲みながら、録画しておいた『スティング』でも観てやろうと思っていたのに……。

「毎度のことだ、検事のご指名だから仕方ないだろ？ それに……
スペシャル・オペレーション・ユニット
逃したままじゃ、最初にヤツを逮捕してくれた古巣の連中にも顔が立たないんじゃないか？ リュウ」
サザビー部長刑事はスピーカーの向こうで苦笑していた。

「別に、俺が取り逃がしたわけじゃないんですが……」

……だいたい、移送担当の警官がぼんやりしすぎなんだ。
リュウは最後の言葉はのみ込んでおいた。

「悪いが、そのまま向かってくれ。ローウェル検事は、五分後に州警察の本部に到着予定だそうだ」

それだけ言って、サザビーは通話を切った。

リュウはゆっくりと首を曲げて、左右を見ながらウインカーを出し、一息ため息をついた。

指示された部屋に足を踏み入れようとした瞬間、ドージエはシステム担当の連中にぶつかりそうになった。

急ごしらえの捜査本部に慌ただしくノートパソコンが設置されている、プロジェクトが据え付けられる。

ローウェル検事は大した人数を集めてはいなさそうだな。

部屋の機材の感じから、ドージエはそう察した。

すでに入室している州警察のメンツが、とげとげしい視線をドージエに向けている。

ドージエはそれを無視し、デスクに置かれていたペーパーを手にとった。

チームの名簿のようだった。

ちらほらと、他のメンバーも入室してくる。

「ローウェル検事の捜査チームって、ここかな？」

男が、ドージエに声をかけた。

確かに、ドージエは戸口に一番近いところに立っていた。

だが、たいていの場合、見知らぬ男は、ドージエに気安く声をかけたりはしない。

自分で意識してやってるわけではないが、近寄りがたいムードを持

っているということだろう。

「ああ、そうだが」

ドージエは意外に思いながら、男の方を向いた。

上背のある男だった。

凄みすら感じられる漆黒の髪は短めにカットされている。

ドージエの目よりも、わずかに上の方にある男の瞳は、驚くほどのスカイブルーだった。

……何系だ？

ドージエには、とっさにわかりかねた。

北欧系にも見えるが……。

切れ長の目や細い顎のラインは東欧系の印象もある。

肌の色は、驚くほど白い。髪が黒いから余計にそう見えるのかもしれない。

黒いタートルネックのプルオーバーの上に、黒いハーフコートを羽織っている。

スラックスではなくジーンズをはいていて、その色合いは、その男の目の色とちょうど同じくらいだった。

STOPの経験の長いドージエは、その男の身体がかなり鍛えられているらしいことも、即座に見抜いていた。

「市警殺人課ホミサイドのリストパトだ」

差し出された右手を握り返しながら、ドージエは口を開いた。

「俺はドージエ・ドナーティだ、リストパト」

リストパトの握手がしっかりとして力強かったのは、ドージエにとつてさらに意外なことだった。

意外というより「違和感」といった方がいいだろうか？

こんな風に、まあ、他の者にとっては普通のことではあるのだろうが、社会的に自分に接してくる男には、なかなかお目にかからない。

不思議な男だった。

愛想がいいというのも違う。

なにかの媚だとかへつらいのようなものは感じない。

ごく自然で静かで、穏やかだった。

そう、強いていえば、この男には「静か」とか「穏やか」という表現があてはまるのかもしれない……。

「あなたの顔はよく知ってる。STOPの『特殊部隊DD』だろうか？」

リュウ・リストパトは、軽く眼を細めてみせた。

「今は隊員じゃないがな」

ドージエがつぶやくように答えると、リュウは軽く首をひねって見せた。

と、突如、廊下に慌ただしい空気が流れ、いくつかの足音が近付いてきた。

「……女王のおでました」

リュウがドージエにだけ聞こえるような小声で言う。

ひどく低い声だ……。

ドージエは思った。

たいていのことには、心惑わされないシフターの自分が聞いても、なんとも言えない響きを感じる。

ただ、穏やかというだけでない……。この声で説得されれば、錯乱した強行犯も銃を置くだろう。そんな印象の声だった。

派手にドアが開けられ、数人の男たちとともに、五十がらみの女性が入ってきた。

おそらく既製品ではない、おそろしく品のよいスーツを纏っている。

……あれがローウェル地区検事か。

ドージェが思った瞬間に、彼女が第一声を発した。

「さあ、始めるわよ、皆そろってる？ バッドボーイズ」

互恵と紛糾

10

「ドージェ・ドナーティ巡査長はどこ？」

会議後のざわついた室内に、女王の一声が響き渡った。場は一瞬にして静まった。

ドージェがローウエル検事の前に歩を進めた。

ローウエルは軽く顎を上げ、ドージェの黄緑がかった灰色の目を見上げて言った。

「あなたが『超人DD』ね、伝説は耳にしているわ」

……スーツだけでなく、香水の付け方まで品が良いということか。ドージェはローウエル検事の顔を見下ろした。

ごく控え目過ぎて、ヒューマンの鼻ではこの距離でおそらく香りは解るまい。

知っている香水だった。

名前は忘れたが、以前嗅いだことのある匂いだ。

「あなたが捜査局に配属になったのは、STOPには痛手でしょうけど。捜査局も優秀な人材を必要としているの、解るでしょ」

ドージェの視線を真つ正面から受け止めてもなお、女王の表情はかわらずさばさばとしたものだった。

どんな女も 人間もシフターも ドージエに正面から見つめられれば、程度の差こそあれ、一様に女としての反応を見せるものだったが。

……選りすぐり老若取りそろえた警官に、「バッドボーイズ」悪ガキたちなんて、あっさり呼びかけてみせるだけのことはある。

ヒューマンの女ながら、いい度胸だ。

ドージエは内心で、少々感服して見せた。

それにしても。

今晚は、なかなか面白いヤツらに逢うじゃないか。

検事といい、あの黒髪の……リストパト刑事？ といい。

ジェシカ・ローウエルはドージエからふと目をそらすと、また声を上げた。

「リュウ、こっちに来て？」

決して大きな声ではない。

しかし、ローウエル検事の声は、座を注意を一瞬にして集めてしまう迫力があつた。

リュウ・リストパトが、静かに近づいてきた。

「市警のリストパト刑事よ」

ローウエルがごく短く紹介した。

俺とリストパトが軽く頷き逢つてるのを見て、「あら、もう顔は合せてるの？」とローウエルがつぶやく。

「話が早いわね。今回はあなた達で組みなさい、ふたり、歳も同じ

くらいでしょ？」

ローウェルはひと言で場を片付けると、赤毛と黒髪の大男をふたりをその場に残し、ドアへと向って靴音を響かせた。

「そうそう。捜査ではリユウが先輩なのだから、ちゃんと言うこと聞きなさい、DD」

突然立ち止まって振り返ると、ローウェル地区検事はドージエにこう言い放った。

今晚が初対面だというのに、なんて女だ……。

面食らっているドージエの返事も訊かずに、ローウェルは靴音も高らかに、部屋を出て行った。

……歳のわりには、結構いい脚してるな。

ドージエもドージエで、そんなようなことを頭の半分では考えていたのだが。

周囲の連中は、露骨なひそひそ話に興じ始めた。

リストパトといい、DDといい、ローウェルも権力にあかせてルツクスの良い男を集めるもんだな……。

……DDがSTOPを出たのって、「そういうこと」なのか？

敵意むき出しの周囲の視線など、ドージエは慣れっこだ。

隣のリストパトの様子を窺ってみるが、聞えているのかいないのか、軽く細めた切れ長の青い目からは、なんの感情も読み取れなかった。

「穏やか」と「静か」に加えて、「ポーカーフェイス」だ。

ドージエはリストパトに対する印象に、またひと言付け加えた。

「ローウェル検事とは知り合いなのか？ リストパト」

自分から、相手のことについて何か質問をするなんて、ドージエには滅多ないことだった。

「リュウでいい。何度かこの手のチームに呼ばれたことがあるというだけだ」

ドージエとリュウは、部屋を出た。

駐車場へと歩きながら、リュウがドージエに尋ねる。

「ドナーティ、STOPから捜査局に異動に？ いつ」

「つい最近だ」

ドージエはふと先ほどのローウエルの言葉を思い出した。

「捜査』では』お前が先輩、とかって言ってたな………どういう意味だ？」

リュウはポケットからキーリングを取り出しながら答えた。

「さあ、俺が以前は市警のSOU特殊部隊にいたからかな？」

「元ハーレーライダーか？ なるほどご同類ってワケだ」

ドージエは目を丸くしてみせる。

初対面の男を相手にこれほど話をするというのも、自分にしては珍しいことだと思いつつも、ドージエは質問を続けた。

「で、ローウエルとはそういう仲なのか？」

リュウは黙ったまま、リモートキーで車のドアロックを解除した。

ドージエの質問は確信的なものだったが、リュウは相変わらず、まったく表情を変えなかった。

ふたりはリュウの黒いレクサスに乗り込む。シートベルトのバックルを押し込んだところで、リュウが口を開いた。

「俺がそんなに要領のいい人間だったら……こんな雨降りの夜中に呼び出されて仕事するようなことになると思うか？」

リュウの答えに、ドージエは思わず吹き出した。

「それは、ごもつとも」

女をたらし込みそうな男という風には見えないが、ドージエとしては、リュウがローウエルの愛人だったとしても、まったく不思議はないような気もしていた。

確かに、リュウ・リストパトはハンサムだ。

ローウエルが入れあげたとしてって不思議はない。

いや、ただ単にハンサムというには、なんというかあまりにも底知れないような雰囲気もあった。

それは、ヤツの容貌のエキゾチックさからも来ているのかも知れない……。

「家に帰る途中だったんだ、呼びつけられたのは……」
リュウはイグニッションを回した。

「妻でも待ってるのか？」

……おいおい、俺としたことが。随分な詮索好きじゃないか？
ドージエは心の中で苦笑した。

「映画が待ってた」

「何の？」

「……ステイングだ」

「ステイング?! アンティークだな、何世紀前の映画だ」

「……ドナーティ、映画ができてから、まだやっと百年ちよつとだ
って知ってるか」

リュウは大まじめに受け答えたが、もちろんそれもジョークだった。

「DDでいい」

ドージエの言葉にリュウは軽い笑い声で答えて、アクセルを踏み込
んだ。

雨はまだ降り続いていた。

「事件自体に、特段気になるところはない……か」

助手席で資料を見直していたドージエが、ぽつりと言った。

「……ドラッグで錯乱状態になった父親が、5歳の息子に銃を乱射
して立てこもったっていう事件だからな。イヤになるほど」ありふ
れた『痛ましさってわけだ」

低い声でつぶやいたリュウの声の響きに、ドージエははじめて静謐
以外のものを感じた。

「ウラがなさそうだと、言いたかったただけだ」
ドージェは運転席のリユウの横顔を見た。

「わかってる」

リユウはギアに手をかけた。
低く静かな声だった。

ふたりはしばらく黙りこんだ。

やがて、ドージェが再び口を開いた。

「……ラリって息子を殺して捕まったあと、やっと逃げ出したとしたら。お前はまず、どこへ行きたい？ リユウ」

「ドラッグを買いに行く」

即答だった。ジョークかもしれない。

「そこはは市警がしらみつぶしにあたってるだろう？」
ドージェが言い返す。

しばらく考え込んだ後、リユウはぼつりと言った。

「……息子に逢いに行く、かな」

「ぼつ？ じゃあ、そのあとでヤクだな。死体を見てブルーになるし、ヤク切れの我慢も限界ってところだ」
ドージェがまぜっかえす。

「今、息子はどこだ？」

今度は、リユウが質問を返してきた。

「さあ？ まだモルグか解剖室だろう」

「……確かめよう」
リュウはハンドルを一度だけ切り返して、車を路肩に止めた。
さすがは元SOUというべきか、リストパトの運転は抜群に上手か
った。

ドージエとリュウは、配布資料と渡されたスマートフォンをチエツ
クする。

「解剖はまだのようだな」

ドージエが口にした途端、リュウが再びイグニッションを回した。

「おいおい、リュウ。普通、警官から逃げ出したヤツが、また火の
中に飛び込むようなマネ……」

ドージエは口ごもり、「ま、普通じゃない……か」と付け足した。

争乱と首尾（1）

11

モルグへは意外に簡単に入り込めるものだ。

死体の出入りが多く、一日中、あちこちの出入口は開いている。

そもそも、そんなに締め切っていたいような場所じゃない。

死体入りの冷蔵庫の扉をいくらしっかり閉めていても、漏れ出し、染みついた匂いは建物中にこもってしかたがない。

正面の扉は形ばかりは閉められていたが、案の定、鍵は掛かっている。
ない。

ドージエとリュウは中に入っていく。

左側の守衛室には煌々と明かりが付いていたが、全くの無人だ。

廊下にも、この時間にはさすがにひと気はない。

ドージエは壁の時計に目をやった。

時間は0時17分。

リュウが左右に静かに視線をむけながら、一歩先を歩く。

背後にはドージエが気を張り巡らせる。

突き当たり右の銀の扉が半開きになっていた。

冷蔵庫のようだ。

リュウがわずかにドージエを振り返る。
ドージエは、レザージャケットの裾から覗くヒップホルスターに手を伸ばし、銃を抜いた。

ドージエが手にしているものを見るやいなや、リュウは、わざとらしく眉をひそめてみせた。

「1911? ……アンティークだな、DD」

その瞬間、くだんの部屋でなにかの機材が倒れるような派手な物音が立った。

つづいて、うめき声。

そして、男の大声がする。その意味は不明だった。

……「ボンゴ」。

ドージエは声にせずに口を動かす。

リュウは軽く肩をすくめて見せた。

「……装備は?」

ドージエは、小声でリュウに尋ねる。

リュウがハーフコートの下にショルダーホルスターを吊っているのは解っていたのだが。

「一応」

ひと言答え、リュウはコートの中から銃を抜き取った。

「グロックか? ……口径は」

「45」

「弾数14か……足りそうか？」

ドージエは軽く鼻で笑う。

「十二分に」

リュウには涼しく答えた。

ドージエの皮肉など、まったくの無視といったところだ。

「シヨーンはどこだ、シヨーン」

なかばろれつの回っていない大声がした。

「……やめろ、おい。撃つな」

男の懇願にも似た声のあとに、何かがぶつかる鈍い音。

そして、また物が倒れる音が続く。

リュウとドージエには部屋の中を見なくても、状況が手に取るように想像できた。

逃亡したヤクの切れかかった被疑者が冷蔵庫に入りこみ、止めようとした守衛が襲われている。

更に詳しく言うと、「ラリって凶暴化した被疑者に銃を奪われた守衛」が、といったところだろう。

「そうだな、撃たれちゃ困るな。まだ解剖前だっていうのに、フレツシユな銃創を新たに作られてもね」

リュウが戯言めいた口をきく。

「……応援を呼びたいか？ リュウ」

ドージエはこう口にしたが、随分と気のなさそうな声だった。

「そんなの待ってられると思うか？ あいつ、なにしでかしてもおかしくなさそうだ」
リュウは即答した。

「STOPもそんなに暇じゃないし……お前さんも古巣ソウに手間かけさせたくないよな？」

ドージエも結局、そんな気はないのだ。

「ドアは一カ所、か」
リュウがつぶやいた。

「奥行きのある長方形の冷蔵庫ってとこだな。リュウ、後から入って、なるべくヤツの後ろに回れ」

ドージエの明らかな上官口調に、リュウは思わず苦笑いをもらった。
「イエッサー、『超人DD』」

ドージエはリュウの皮肉に、一瞬顔をしかめたが、すぐに指示を続けた。

「3カウントだ。俺がまず右、お前は左から……3、2、1」

ドージエのブーツの分厚いラバーソウルが、スチールのドアを蹴り開けた。

首尾と争乱(2)

12

半開きだったスチールドアは、勢いよく開いた。

中途半端な位置にあったワゴンがはじき飛ばされ、膿盆やピンセットが派手な音を立ててタイル張りの床に飛び散る。

ドージエは堂々と正面を向いたまま、部屋に入っていく。

撃つなら撃て、とでも言うように……。

だらりと下げた腕に銃を持ったヤク中の小汚い容疑者も、床に転がった制服姿の中年男も仁王立ちのドージエに目が釘づけになる。

その隙に、リュウは中腰の姿勢で、ドージエの背後から部屋の奥へと回った。

『超人D.D』の各種の^{伝説}レジエントは、マサチューセッツの法執行者の間には、広く流布していた。

ただ、正直、リュウはそれを耳にするたび、ずいぶんと現実味の感じられない話だな、という印象を抱いていたのだった。

だが……。

現実にヤツの突入を目の当たりにして。

リュウは、それが^{伝説}本当のことだということ^を納得せざるを得なかった。

ドージエの赤銅色の髪は、鬘のように逆立っていた。壁を盾にするでもなく、腰をかがめるでもなく。黄緑に燃える目でターゲットを見据え、真正面から銃を構えて照準を合わせる。

それはまるで、いまにも獲物に飛びかかるうする獅子のような姿だった。

一瞬、奇妙な静けさが冷蔵庫の中に広がる。

ヤク中のわめき声も、守衛の悲鳴も吸い込まれるように静まった。

「……おい」

ドージエの声が響く。

リュウには、それは声というより、短い咆哮のようにもきこえた。

「ストーン・ジャンキー、銃を捨てろよ」

半開きになったヤク中の口から、よだれが垂れている。

リュウは素早く被疑者の真後ろに回り込み、死体の乗ったストレッチャーの間にかがみ込んだ。

そして、ドージエと視線を合わせる。

ドージエは、目だけでリュウに軽く頷いてみせる。

続いて、リュウは床に這いつくばっている守衛に視線を向けた。運良くふたりの目が合った。

リュウは、守衛に向って、掌を内側にして人差し指と中指を小さく数回曲げ伸ばして見せた。

そのジエスチャーに気付いた守衛は、なんとか気力を振り絞り、まるで芋虫が這うような様子で、リュウの方へと身体を動かし始める。次の瞬間、トリガーガードに入っていたヤク中の人差し指が痙攣し、一発、弾丸が発射された。

轟音。そして硝煙の匂いが立ちこめた。

床に当たった跳弾が、なにかの金属に当たった音の残響が続いた。

守衛の身体はふたたび恐怖ですくみ上がり、その場から動かなくなった。

リュウは溜息を押し殺して、腕をめいっぱい伸ばして、守衛のジャケットの袖口を掴んだ。

力をこめて、守衛の身体を引っ張る。

……ドーナツとフレンチフライの喰いすぎだな。

守衛は見事な中年太りだった。

リュウは、銃を持った方の手も添えて、なんとか守衛をストレッチャーの下へと引き入れた。

守衛の安全を何とか確保し、リュウはふたたび、ドージェとヤク中の方へ視線と銃口を向ける。

容疑者はというと、自分の銃声の大きさに半ばパニックに陥っていた。

悲鳴とわめき声をあげながら、右手に握った銃を振り回している。手にしているのはグロック19だった。

グロックは、かなり強い力で引き金を引かなければ、発射されない。普通なら、暴発することは珍しい。

しかし、ヤツはもう一発撃ってしまった。

次に引き金を引くのは、より容易いだろう……。

リュウは容疑者の背中を注視しながら、そんなことを考えていた。

そんな状態の容疑者に向かって、ドージエは何のためらいもなく真正面から近づいて行く。

容疑者の手にしたグロックが、ふたたび火を噴いた。

弾丸はドージエのレーザージャケットの左袖をかすり、開いているドアを抜け、廊下の壁にめり込んだ。

ドージエの二の腕から、血がほとばしる。

どういっつもりだ。あいつ……また弾に当るぞ?!

なおもヤク中に近づいていくドージエの行動に、リュウは面喰らった。

リュウは、容疑者の背中の中やや下あたりに、手にしたグロック21の照準をあわせた。

特殊部隊

……SOUの任務ではないし、射殺前提には発射できない。

しかし、ヤツの動きをとめられなければ、ドージエの身が危険だ。

ドージエのジャケットの左袖が、あっという間に朱に染まる。

しかし、ドージエは蜂がさしたほどの反応も見せず、平然と容疑者の前に立った。
そして、おもむろに容疑者の手にする銃へと血まみれの左手を伸ばした。

ドージエは容疑者のグロックのスライドを握りしめた。
ヤク中は、狂ったように、引き金を引こうとするが、トリガーはびくとも動かない。

容疑者は、両手で銃を持って、ドージエを振り払おうと暴れまわった。

ドージエは手にしていたコルトガバメントをジーンズのポケットにつっこむと、両手を使って、ヤク中からグロックを奪おうとした。すると、血で滑ったドージエの左手が、容疑者の銃から離れた。

ふたたび轟音が響く。

弾は天井の照明にあたり、ドージエと容疑者にガラスの破片が降り注いだ。

他の照明も幾つかショートし、部屋がぐっと暗くなった。

その瞬間。

ドージエの身体が、本能的に危険に反応した。

身体変身の表面に電流の走るような痺れを感じ、ドージエは自身のシェイプシフトの前兆を感じ取った。

ドージエを包む光のようなものが、薄暗い部屋の中、ほんの一瞬、微かに浮かび上がる。

ドージエは慌てて自制した。

しかし、それは、ドージエの瞳の形が変わり、黄金色の産毛きんが首筋

にきらめいた後だった。

そして、次の瞬間にはドージエの身体は、また元に戻っていた。

あいかわらずヤク中の容疑者は、危なっかしく引き金に指をかけたまま銃を振り回していた。

リュウは低い姿勢を取ったまま、しっかりとその背中に照準を合わせ続ける。

そして、ドージエと容疑者の位置関係を注視しながら、射撃のタイミングを見計らっていた。

ほんのわずかの間、ドージエの身体が横にずれた。

リュウはすかさずトリガーを引いた。

重い銃声が響き、容疑者は足を滑らせるような体勢で膝を折り、ドージエの方へと倒れ込んだ。

「……生きてるか？」

リュウは、立ち上がりながら声をかける。

「どつちがだ？」

ドージエが、倒れ込んできた容疑者の肩を片手で掴んで支えながら答えた。

そして、ヤク中の右手に握られている銃をむしり取る。

「容疑者が」

リュウが近づき、ドージエから血まみれのグロック19を受け取る。

「まあ、呼吸はしてるようだな」

ドージエが素っ気なく言い捨てた。

「あんなタイミングで撃ちやがって。俺に当てるつもりかと思っただけ？ リュウ」

ドージエが厭味たらしく続けた。

「.45ACPだ、貫通しにくいだろう、それに……」

リュウは、腰を抜かした守衛の腕を取って、立たせながら言った。

「俺は、お前が撃たれたがってるんじゃないかかとも思えたが？ 本当に無茶苦茶するんだな、DD」

容疑者の背中を布で押さえ、処置をしているドージエに、リュウがさらに皮肉な口調で言い返す。

遠くからサイレンの音が近づいてくるのが、モルグの冷蔵庫の中にも響いてきた。

「傷は大丈夫か？ DD、出血がひどいようだが」

リュウが、蒼い目を軽く細めて尋ねた。

「……擦っただけだ」

DDは軽く受け流す。

怪我については、あまり詮索はされなくなかった。

なぜなら、傷自体は、もうとつくにふさがりつつあったからだ。

シェイプシフトしかけたせいで、いつもよりもさらに傷の回復が早まっていた。

リュウに傷を調べられたりしたら、不審に思われる。

それに……。

こいつは……リュウ・リストパトは、さっきの俺の様子を見ていたはずだ。
俺のシェイプシフトの前兆を……。
修羅場に動転して、何も気付かないようなタマじゃない……。

顔を合せて数時間にもならなかったが、ドージエには、リュウがその辺の凡庸な捜査官とはまったく違っていていることを感じ取っていた。

人間
ヒューマンのくせに。

あの状態で、これだけの射撃が出来るヤツだ。なにも気付いてないはずなどない。

なのに、コイツリュウときたら、俺への態度をまるで変えることもないじゃないか？

……ポーカーフェイスにしたって、ここまで徹底できるとは！

駆けつけてきた市警の警官や検事チームの連中に容疑者の処理を任せて、ドージエとDDはモルグを後にした。

ふたりは、リュウのレクサスへ向って歩いていく。

すると、パトロールカーの脇に立っていた制服警官が、手にした無線機をふりながら声をかけてきた。

「リストパト！ DD！ お呼びだ」

リュウとDDは警官の方を振り返った。

リュウが警官から無線機を受け取る。

「 なかなか仕事が早かったわね、ボーイズ」

交信相手はローウェル検事だった。

「早く帰って映画を見たかったんで　オーヴァー」
リュウがわざとらしく、ひと言付け足す。

「発砲は何発？」
ローウェルが尋ねた。

「こっちは一発、向こうは二発」
リュウが手短かに答える。

「そう？　じゃあわたしからのご褒美。報告書の提出は一日待って
あげるわ、オール・オーヴァー」

一方的に無線が切れた。
リュウはドージエを振り返る。ふたりは思わず顔を見合わせ、顔を
しかめた。
無線機を受け取った警官が、忍び笑いを漏らしている。

リュウがレクサスの運転席に乗り込んだが、ドージエは一瞬、躊躇
した。
血でシートを汚すかもということが、頭をよぎったのだった。

リュウは、ドージエをみて目を細め、軽く顎をあげて首をかしげて
見せた。
「乗れよ？」の意味らしかった。

ドージエが助手席に乗り込みドアを閉めると、リュウはすかさずイ
グニッションを回す。

「……高いレザージャケットだったんだが。経費で落ちないのか、

これは？ 刑事っていうのは割に合わないな」

ドージエがぼつりと不満を漏らすと、リュウは軽く噴き出した。

しばらくの間、車内に沈黙が流れる。

最初のうちは、自分の異常さを垣間見たはずのリュウが、あまりにも平然とした態度のままに、ドージエは神経をぴりつかせていた。

しかし、リュウのそんな様子に、次第に不思議な居心地の良さを感じ始めてもいた。

奇妙に気があうような……。

リュウのことをそんな風にも感じていたし、自分のリュウに対する警戒心の薄さに、内心では驚いてもいた。

……まあ、映画の趣味は合わなさそうだがな。

ドージエがそんなことを思い巡らせていると、リュウが静かに話しはじめた。

「せっかくのジエシカ・ローウェル検事のご厚意だ。報告書は明日の夜にまとめるってことで、構わないかな？ DD。俺は明日の非番を満喫したい」

「俺は別にかまわんが？ よかったな、『ステイング』が三十回くらい見られるぜ？ リュウ」

ドージエは鼻で笑いながら答えた。

「三十回、ね……。一体、何倍速で再生しろっていうんだ？ DD」

リュウは低い声で「ううん」と、わざと乱暴にハンドルを切ってみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5282x/>

11月とすべての後で

2011年10月26日04時02分発行